

学生とともに写真展をする - 野外撮影の技法と公開の姿勢 -

亀井伸孝
愛知県立大学

■はじめに：消費する人から創る人へ

現代におけるフィールドワークの意義とは何だろうか。ネットであらゆる情報が入手できてしまう便利すぎる時代に、あえて「書を捨てて、ネットも捨てて」、屋外に行き見聞きすることの意義は何か。それは、「コンテンツを消費する人から、創る人への脱却」のためであると私は考えている。

本報告では、愛知県立大学外国語学部国際関係学科において、2011年から取り組んでいく「フィールドワーク・フェスタ」の話題を中心に、その効果を考えてみたい。

■「国際関係学科フィールドワーク・フェスタ」発足のきっかけ

国際関係学科は、2009年に発足した新しい学科である。私は新学科発足3年目の2011年に着任した。その時に学生たちから聞こえてきたのは、「国際って、何やってるのかよくわからない」というボヤキのような声であった。地域や言語の多様さが、学科としての特色のなさというイメージを生んでいた。一方、学生たちが夏休みに何をするか尋ねてみたところ、世界各地に留学に行き、旅行に行き、また、ボランティアに参加すると言う。その直接的な体験自体がまたとない学びであり研究であると気付いた私は、学生たちを「受け身の学び手」に留め置くのではなく、「体験を発信する側」に位置づけよう、それを学科の特色にしていこうと着想したのである。「じゃあ、秋に帰国したら、みんなで旅の体験を持ち寄るのはどう？」「あ、それおもしろそうですね」という何気ない会話から始まった。

2011年の秋に、世界中から帰ってきた学生たちとさっそく相談し、三つの企画をすることとした。「旅の写真展」（自分たちが撮影した写真をパネルで展示する）、「旅の報告会」（写真や動画を持ち寄って口頭発表する）、「旅の茶話会」（旅先のお土産を持ち寄り、また現地で覚えてきた料理を作ってみんなで食べる）である。これらを「国際関係学科フィールドワーク・フェスタ」と総称して、学科独自の秋のお祭りとして位置づけたのである。

■「国際関係学科フィールドワーク・フェスタ」3年間のあゆみ

1年目は、44点の写真（16人の学生・教員による14カ国での撮影作品）が出品された。お気に入りの写真を選び、パネルを自作して、自分たちで釘を打って展示を完成させた。学内の多くの学生や教職員から、学科の学生たちの世界各地での活躍ぶりに対する評価がまいった。報告会も茶話会も盛況で、五感を使ってお互いに体験を発信し、理解する機会となった。

初回の試みが楽しく有意義であったため、2年目も実施しようという雰囲気ができた。やがて、「次に旅行に行くときは、写真展に出品するためにいい写真を撮ってきます」という反応が出始めた。このように、ただ漫然と撮りためるのではなく、だれかに見せようという意識をもって出かけることが、フィールドワークにおいては重要である。この姿勢が培われたことによって、次年度も有意義な企画につながった。

こうして、2年目は50点（28人の学生・教員による20カ国・地域での撮影作品）、3年目は74点（39人の学生・教員による25カ国・地域での撮影作品）。地域も、日本のほか、アジア、ヨーロッパ、中東、アフリカ、北米、南米、オセアニアと、世界中に広がった。

■いくつかのスピノフ企画

毎年、学生たちが自慢の写真を持ち寄り、コンテンツの蓄積ができてくると、それを他の場面でも活用しようという着想が生まれた。オープンキャンパスの学科ブースでの写真展示と自作絵はがきプレゼント、国際交流行事ワールド・コラボ・フェスタでの写真展示と絵はがき販売、JICAなどが主催する「なんとかしなきゃ！プロジェクト」が実施したウェブ上の写真展への出品、愛・地球博記念公園夏まつりでの公開の写真展、そして、国際関係学科の学生オリジナルサイトやブログでのコンテンツとしての活用などである。学生たちが自ら作品を創るという姿勢の涵養は、映像制作ワークショップの実現へとつながり、桃山学院大学と合同での映像作品上映会の実施へと至った（南出報告参照）。

今や、全学でもっともアクティブな、コンテンツ発信型の学科となっている。教員はその仕掛けを作ることに協力したが、コンテンツを世界中から集めて来て、発信し、それを継承して選択肢を拡大してきたのは、ほかならぬ学生たちであった。

■撮影調査実習、スケッチ実習も

最近では、撮影された写真を持ち寄るだけでなく、現場での撮影指導ということも試みている。学生たちとカメラを持ってキャンパスや近隣の公園を歩き、何かひとつのテーマを決めて自由に撮影するとともに、その写真を盛り込んだ口頭発表を行う。技術指導よりも、「後日、報告の場面で役立つものを撮影しておく」という着眼点の指導が多い。「調査地に入る時と出る時に、調査地の風景を撮っておく」「看板や地図など、情報が豊富に含まれているものを撮る」「比較のために、興味深い対象とそうでない対象の両方を」「メジャーもしくはボールペンなど、尺度となるものを配置して撮影する」などである。

さらに、視覚的な記録の原点として、手描きのスケッチを活用する社会調査の実習も行っている。私はかつてアフリカで調査していた時にカメラが故障してしまい、スケッチを活用してしばし調査を続行した経験がある。社会調査においてスケッチが役に立つことを発見した機会ともなった（亀井, 2010）。その経験に根ざした授業の事例である。

■おわりに

今日では、高機能のスマートフォンやデジタルカメラが発売されており、いわば素人でもある程度の質の写真を撮ることができる。重要なポイントは、「後で人に見せるために記録する」という意識であり、それを公開して議論ができる場作りである。技術革新では解決しない「フィールドワーク・マインド」の育成を、これからも追求していきたい。

「なんとかしなきゃ！プロジェクト」ASIA Photo Gallery

<https://www.flickr.com/photos/nantokashinakya/sets/72157638272384603/>

愛知県立大学外国語学部国際関係学科学生オリジナルサイト <http://apukk.web.fc2.com/>

亀井伸孝. 2010. 『森の小さな〈ハンター〉たち：狩猟採集民の子どもの民族誌』京都：京都大学学術出版会.